

シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

## 第6回 いま、アフリカの子どもの本は？

平成24年6月30日

講師：さくまゆみこ氏

### テーマ：アフリカの物語と本

今、バックがラウンドで流していただいているのは、「コラ」という弦楽器で、グリオという——後で紹介しますが——職業的な語り部の人しか使えない楽器です。アフリカというと太鼓はご存じでも、これは知らないという方もおいでだし、とてもきれいな音なので、流していただいています。

「いま、アフリカの子どもの本は？」というテーマですが、アフリカ大陸の中にはいろいろな文化があり、サハラ以北とサハラ以南でも大きく違います。国も55ないし56ありますので、本当に多様なのですが、今日は英語圏の国の出版事情を中心にお話をしたいと思います。

本日は、私が持っている本の表紙をスライドにして持ってきました。実物はこの後ろにありますので、後でどうぞ手にとって見ていただきたいと思います。アフリカで出版されている児童書は、私たちが子どもの本と聞いてイメージするものとは少し違うかもしれません。それにはいろいろな理由があるのですが、聞いているうちにわかっていただけるかと思います。また本のリストを配布していますが、今回は、欧米や日本で出ているアフリカの本が中心ではなく、アフリカの出版社が出している本を中心にしたリストになっています。

今日の話の流れですが、最初は、日本で出版されているアフリカ人作家や画家の人たちについて聞いていただきます。この中で登場する作品については、国際子ども図書館で実物を用意していただいているので、後ほど手にとって見ていただきたいと思います。

次に「20世紀のアフリカ 100ベストブックス」に選ばれた児童書について話します。これは、2002年にジンバブウェのブックフェアで発表されたもので、いろいろなアフリカの国の作品が選ばれていますが、そのうちの4点が児童書なのです。

その次にアフリカで出ている児童書を紹介していきます。昔話や口承の物語、絵本や読み物です。最後に、子どもの本にかかわるいろいろな試みをご紹介します。盛りだくさんなので、2時間で終わるかどうかわかりませんが、早速始めさせていただきます。

#### 1. 日本で出版されているアフリカ人作家・画家

##### (スライド) 日本で出版されているアフリカ人作家・画家

最初に、日本で出版されているアフリカ人の作家、画家には、どのような人たちがいるのかということを見ていただきます。私たち「アフリカ子どもの本プロジェクト」でも、2007年以降に出ている、ア

フリカに関わる児童書を継続的にすべて読み、これは推薦しよう、これはちょっと推薦できないね、と皆で話し合い、推薦できる本をセットにして、日本各地で巡回展示しております。「アフリカ子どもの本プロジェクト」のホームページ<sup>1</sup>に、その推薦図書リストがありますのでご覧ください。私自身は、アフリカの出版社が出したもの、アフリカの人たちが絵を描いた、あるいは文章を書いたものを中心に翻訳したいと思って、今まで仕事をしてきました。

**(スライド)『いちばんのなかよし：タンザニアのおはなし』(ジョン・キラカ作、さくまゆみこ訳、アートン、2006年、請求記号 Y18-N06-H248)**

ジョン・キラカ (John Kilaka) さんは 1966 年生まれのタンザニアの方で、10 歳になってから小学校に上がりました。絵がとても好きで、はじめは地面に絵を書いていたのですが、学校に行くと黒板があった。黒板にいろいろな絵を描いて先生に怒られたというエピソードの持ち主です。この方は、ティンガティンガ派と呼ばれています。ティンガティンガというのは、もう亡くなっているタンザニア人の画家の名前ですが、彼は絵を描くだけでは食べていかれないので、いろいろな職業に就きながら、自転車に塗る塗料でベニヤ板に絵を描いて評判になります。ヨーロッパから来る観光客が彼の絵を買い求めるようになり、次第にお金持ちになります。余裕ができたティンガティンガさんは、若い人を育てようと芸術家のワークショップのようなものを作ります。そこに集まってきた人の一人がジョン・キラカさんです。お金を儲けるために観光客用の絵を描く若者も多かったのですが、ジョン・キラカさんは絵本を描くことを始めました。

日本ではキラカさんの絵本が 2 冊翻訳されています。この絵本は 2 冊目で、原書はルワンダのバカメー後で紹介しますが一とドイツの出版社で出ました。キラカさんは、自転車に乗って各地の村をまわり、昔話を集めるということもやっている、とてもおもしろい人です。

**(スライド)『ゴリラとあかいぼうし』(山極寿一作、ダヴィッド・ビシームワ絵、福音館書店、2002年、請求記号 Y17-N02-698)**

ダヴィッド・ビシームワ (David Bisimwa) さんは、コンゴ民主共和国の方です。プロの絵描きではないし、絵の勉強をしたわけでもありません。ゴリラと人間の共存を考える POPOF (ポポフ) ——ポレポレ基金 (Pole Pole Foundation) とも言うのですが——という、ゴリラと人間の共生を目指す NGO でゴリラのトラッキングを仕事にしている人です。ゴリラと人間の両方をちゃんと考えている人のひとりで、同じポポフのメンバーで、世界的に有名なゴリラ学者の山極寿一さんが文章を書いています。これは日本で最初に出た絵本です。

**(スライド)『おじさんのブッシュタクシー』(クリスチャン・エパンニャ作、さくまゆみこ訳、アートン、2007年、請求記号 Y18-N07-H315)**

---

<sup>1</sup> <http://www.hananotane.com/> (accessed 2014-6-18)

これも私が訳している絵本です。クリスチャン・エパンニヤ（Christian Epanya）さんはカメルーン人ですが、やはり絵描きではなかなか仕事がないので、最初は原油の積み込みの仕事をしていたのですが、その後、どうしても絵が描きたいということで美術学校に行き、それから画家になりました。今はフランスに暮らしていて、この本も最初はフランスで出版されました。

絵本の舞台はセネガルです。カメルーン画家が、セネガルで取材して絵本にしました。セネガルはイスラム教の人たちがとても多いところなので、この表紙を見ていただいてもわかりますが、町にはモスクがあります。それから、ブッシュタクシーというのは何かと思われるでしょうが、これは私設のバスです。運転手さんが、自分で持っているミニバスに、同じ方向へ行く人たちを乗せて走って行きます。一般名称としては、英語だとブッシュタクシー、フランス語だとタクシールスですが、ケニアではマタトゥと呼ばれるなど地域によっていろいろな名前があります。ブレーキがきかないなど、きちんと整備されずに走っている場合もあって、道端で横倒しになっているのを見かけることもあります。この絵本のタクシーはとてもよく整備されていて、土地の人の誕生から死までのあらゆる場面で利用されています。

**（スライド）『バオバブのきのうえで：アフリカ・マリの民話』（ジェリ・ババ・シソコ語り、みやこ・みな再話、ラミン・ドロ絵、福音館書店、2005年、請求記号 Y18-N05-H341）**

この絵本の物語を語ったジェリ・ババ・シソコ（Juvenile Baba Sisoko）さんはグリオ（語りを職業とする人）です。「ジェリ」という名前を聞いただけで、この人はグリオだと分かる、そういう名前です。そして、これは「ンゴニ（ngoni）」という弦楽器です。グリオによって代々使う楽器が違うのですが、どれも自分で作ります。

**（スライド）『歌う悪霊：北アフリカ サエル地方の昔話から』（ナセル・ケミルぶん、エムル・オルンえ、カンゾウ・シマダやく、小峰書店、2004年、請求記号 Y18-N04-H494）**

ナセル・ケミル（Nacer Khemir）さんは、サハラ以北のチュニジアの方でアラブ系です。サエルという地域の昔話を、ちょっと怖い絵本にしたものです。

**（スライド）『岩をたたくウサギ：サバンナのむかしがたり』（よねやまひろこ再話、シリグ村の女たち絵、新日本出版社、2012年、請求記号 Y17-N12-J469）**

これは新しく出た本です。ガーナのシリグ村というところは、このように土で家を作り、家の壁に絵を描くのです。南アフリカのンデベレの人など、いろいろな地域の人が家に絵を描いていますが、シリグ村もそうで、この絵本の絵は、ふだんは壁に絵を描いている女の人たちが描いたということになっていて、とても面白いと思いました。

**（スライド）『ほーら、これでいい』（ウォン＝ディ・ペイ，マーガレット・H.リッパート 再話；ジュリー・パシュキス 絵；さくまゆみこ 訳、アートン、2006年、請求記号 Y18-N07-H48）**

ウォン=ディ・ペイ (Won-Ldy Paye) さんはリベリアのダンという民族の方です。そして、ストーリーテラー、つまりグリオの家系なのですが、この地域ではグリオのことをトゥロカメンと言うそうです。この方はその関係で、おばあさんからいろいろな話を聞いて育ちました。そして、お祭りやお祝い事の時には、おばあさんにくっついていって儀式を見ていたのですね。ご本人は書いていませんが、やはりリベリアは内戦がとても激しかったところなので、そういうこともあったのでしょうか、今はアメリカに住み、学校を回ってストーリーテリングを行ったり、ダンスや太鼓のワークショップを開いています。オリジナルは、アメリカで出ています。

**(スライド)『AはアフリカのA: アルファベットでたどるアフリカの暮らし』(イフェオマ・オニェフル作・写真、さくまゆみこ訳、偕成社、2001年、請求記号 Y2-N01-144)**

イフェオマ・オニェフル (Ifeoma Onyefulu) さんはナイジェリアの方で、写真絵本を何冊も出しています。偕成社から5冊出ていて、私が翻訳をしています。今はイギリスに住んでいますが、自分の子どもたちも含め、国を離れて暮らしているアフリカの子どもたちに、アフリカの文化や風習を伝えようという意図があって写真絵本のシリーズを出しています。ちょっと面白い話をしますと、この絵本の舞台はナイジェリアなので西アフリカです。でも、この絵本を東アフリカのケニアにあるエンザロ村の子どもたちに読んであげると、「あ、僕たちがいる」と言うのです。距離は離れていても、共通する部分もあるのだなと思います。

**(スライド)『ナイルの流れのように』(ハムザ・エルディーン著、中村とうよう訳、筑摩書房。1990年、請求記号 Y3-916)**

ハムザ・エルディーン (Hamza El Din) さんは、ウード奏者としてワールド・ミュージックの世界で活躍していた方です。この方の音楽もとても素敵なので、聞いていただけるといいのですが、やはり大変面白い人生を送って自伝を書いており、日本で出版されています。

**(スライド)『アフリカの子』(カマラ・ライエ作、さくまゆみこ訳、偕成社、1980年、請求記号 Y7-7969)**

これも私が訳した自伝的小説です。カマラ・ライエ (Camara Laye) さんは、苗字を見ると分かるのですが、代々鍛冶屋をやっているお家柄です。ギニアのクルーサというところで生まれ、15歳でギニア共和国の首都コナクリにある学校に移りました。その後、フランスに渡って小説家になった方です。この本にもグリオのことが詳しく書いてあります。よく、ラテンアメリカの文学の特徴はマジックリアリズムと言われるのですが、アフリカの作品も負けていません。日常世界が舞台でも、ちょっと信じられないような不思議なことがたくさん出てきますからね。

**(スライド)『わたしは歌う』(ミリアム・マケバ、ジェームズ・ホール著、さくまゆみこ訳、福音館書店、1994年、請求記号 Y3-1186)**

ミリアム・マケバ (Miriam Makeba) さんは、「パタ・パタ」という歌で有名な人です。南アフリカの生まれで、「ママ・アフリカ」と呼ばれていました。演奏旅行で国を出た時に南アフリカのアパルトヘイト政権の批判をしたので、国に帰ることができなくなります。アメリカに住んだり、ギニアに住んだり、ジャマイカに住んだりと転々としていましたが、マンデラさんが釈放されてアパルトヘイトがおわりを迎えると、ようやく帰国することができました。これも、マジックリアリズムいっぱいの本です。マケバのお母さんは、不思議な力の持ち主で先祖の霊を呼び寄せることができというサンゴマで・イタコのようなイメージでしょうか—そんな力を、マケバも少しは持っていたのかもしれない。この本も私が訳しました。

**(スライド)『ぼくはマサイ』(ジョゼフ・レマソライ・レクトン著、ハーマン・ヴァイオラ編、さくまゆみこ訳、さ・え・ら書房、2006年、請求記号 Y3-N06-H20)**

これも私が訳しているのですが、ジョゼフ・レマソライ・レクトン (Joseph Lemasolai Lekuton) さんは遊牧民の子どもです。私たちが「マサイ」と呼ぶ人は、大半がタンザニアとケニアの間あたりに住んでいるのですが、この方はケニアの北の方に住んでいる「原マサイ」と言われる民族です。マサイの人たちは、学校とか社会の枠の中に入るのが好きではないのですが、法律ができて、マサイも各家族に一人ずつ学校に行かなければいけないことになったのです。しかし、マサイの人たちは遊牧をしている、つまり定住していないので、学校への行き帰りがとても大変です。著者は寄宿学校に入りますが、長い休みに入って家に帰る時、家がどこにあるか分からないのです。そんなわけで、最初はお兄さんが学校に行く子として選ばれたのですが、学校が大嫌い逃げ帰ってしまい、仕方がないので、レクトンさんが行くことになりました。学校に行ったら、先生はいい子にしているとあめをくれたりするので、学校とはなかなかいいところではないかというふうに、学校が好きになりました。それで、ずっと勉強を続けて、後にはハーバード大学で国際教育政策の修士号まで取ってしまうのです。今、彼はケニアの国会の代議士になっています。

**(スライド)『サンコン少年のあふりか物語』(オスマン・ユーラ・サンコン作、久我通世絵、講談社、1993年、請求記号 Y8-9984)**

このオスマン・ユーラ・サンコン (Ousmane Sankhon) さんは、皆さん御存じなので、紹介しなくていいですね。この人は元々外交官でした。

**(スライド)『戦場から生きのびて：ぼくは少年兵士だった』(イシメール・ベア著、忠平美幸訳、河出書房新社、2008年、請求記号 GF191-J1)**

シエラレオネという国でも内戦が続き、子どもの兵士についていろいろな報道がされています。例えば、麻薬を注入されて殺人兵器と化す、というようなこともあるわけです。その少年兵士になった人が、このイシメール・ベア (Ishmael Beah) さんです。後にアメリカに渡って、その体験を書いて出したのが、この本です。アフリカの人には戦争が好きなのだ勘違いしている人もいますが、そういうことでは

なく、いろいろな理由があって、内戦をさせられているというところがあると思います。

**(スライド)『風をつかまえた少年』(ウィリアム・カムクワンバ、ブライアン・ミラー著、田口俊樹訳、文藝春秋、2010年、請求記号 ND158-J59)**

ウィリアム・カムクワンバ (William Kamkwamba) さんはマラウィの人で、学校へは行ったのですが、貧しかったため途中でやめざるを得なくなりました。食うや食わずの生活も体験しています。でも、近くに図書館があり、彼はそこに行って、自分にも分かるものを見ていったのです。その中に風車の写真があって、彼は自分でも作れるのではないかと思いました。この写真は最初に彼が作った風車です。これは、自転車のスポークです。材料は、どれもゴミ捨て場から拾ってきました。村の人たちは「あいつ、とうとう頭がおかしくなったな」と言うのですが、とうとう作り上げたんですね。実は、この風車の下に家があり、電線が家の電球に繋がっているのです。そして、風が吹くと、本当に電気が点いたのです。そういう装置を自分一人で作り上げたのが、カムクワンバさんです。そこに、図書館が大きな役割を果たしていたというのが、いいですね。とても好きな本です。彼は今、アメリカで奨学金をもらって、大学に通っています。

## 2. アフリカの語りと音楽

このように見てくると、日本で出ている本は、元々ヨーロッパやアメリカなどで出版されている本が多いということが分かると思います。アフリカの人たちは、今までは出版文化というものにそれほど熱心ではなかった。その理由の一つに、文字と紙の文化が発達せず、語りの文化、声の文化がとても発達していたということが挙げられます。川田順造さんの『無文字社会の歴史：西アフリカ・モシ族の事例を中心に』(岩波書店、1976.12、請求記号 G141-16)をお読みになると分かりますが、文字の文化が発達しなかったというのは、やはり気候とかいろいろなものが影響していることもあるのだと思います。語りという豊かな文化や、声による物語が存在していたので、特に本を必要としなかったということもあるでしょう。

アフリカの語りは多くの場合、途中で歌が入ったり、言葉がとてもリズムカルだったり、手拍子があったり、聞き手と語り手の間で声を掛け合ったり、いろいろなものが合わさって一つの世界を作っていくのですが、そういう部分は文字にすると消えてしまいます。だから、それでは面白くないとアフリカの人には思っていたのかもしれませんが。

今流してもらっているのもグリオの音楽ですが、そのグリオについて少し紹介します。

**(スライド) グリオ—アフリカの語り部・楽師**

グリオというのは、サハラ以南のアフリカでストーリーテリングを職業とする人たちです。地域によって呼び名はいろいろあります。これは世襲ですので、親が子に伝え、子が孫に伝える、というように、代々語る内容や技能を伝えていきます。民族の歴史や叙事詩、言い伝え、様々な祝い事の席で歌う歌、

そして吊いの歌など、こういったものを全部覚えて、求めに応じて語ったり歌ったりするのがグリオです。使っている楽器は、先ほど紹介したンゴニの場合もありますし、コラや太鼓の場合もあります。

アフリカの人たちはとても語りが上手です。「アフリカ子どもの本プロジェクト」が協力した図書館のオープニングの時に、いろいろな偉い方が立って演説したのですが、皆さん演説が好きで雄弁なので、いつまでも終わらないといったこともありました。幼稚園の先生も一枚の写真を子どもに見せながら延々とお話をしていました。こういうことから、語りが本当に根付いているのだとわかります。普通の人たちも話し上手なのですが、それだけでなく「語り」を職業としている人たちもいるのですね。

### **(スライド)「マリの王様に仕えるグリオ」**

例えば、これは「マリの王様に仕えるグリオ」という 1890 年の絵ですが、この人も先ほどのジェリ・ババ・シソコさんと同じような楽器を演奏しながら語っていることが分かると思います。

### **(スライド) セネガルのグリオ**

これは、少し昔のセネガルのグリオです。持っている楽器が少し違います。グリオは皆、これらの楽器を自分で作ります。弦楽器の場合、ヒョウタンを半分に割って——木の場合もありますが——、動物の皮を張り、ネックをつけるというのが一般的です。

### **(スライド) 楽器「コラ」**

これが、今聴いていただいている「コラ」という楽器です。胴体は半分に割ったヒョウタンで、断面には動物の皮を張っています。21 弦ですので、弾くのはとても難しいと思います。こんなにきれいな音が出るということ、皆さんに聞いていただきたかったのです。

この楽器は、グリオしか使ってはいけないと言われていたものの一つです。弦を手前の方に向けて弾きます。スライドを見ると分かるかと思いますが、胴体の上部に穴が開いています。

今では、グリオの人が日本にも来ています。私は京都で、ギニアのグリオの人がコラを弾くのを生で聞いたことがあるのですが、その時、グリオの人がリクエストはないかと聞いたら、京都の FM 放送局の人が、自分の放送局が繁盛するような歌を歌ってほしいと言ったのです。すると、彼はちゃんと歌い、リクエストした人は、ご祝儀をコラにあいた穴に入れました。だから、元々はそんなふうにして暮らしている人たちなのだとということが、とてもよく分かりました。皆、自分で楽器を作るので、人によっては 19 弦といったように、21 弦ではないものを使っている人もいます。

### **(スライド) 女性のグリオ**

グリオは男だけかという、女の人もいるのです。どちらもマリの首都バマコの女性グリオです。

### **(スライド) ワールド・ミュージック**

グリオの中にはワールド・ミュージックで活躍している人たちもいます。モリ・カンテさんとかトゥ

マニ・ジャバテさんのように、コラを弾いている人もいます。この人はユッス・ンドゥール (Youssou N'Dour) さんですが、お母さんの家系がセネガルのグリオらしく、音楽界ばかりでなく政治の分野でも活躍しています。

次に「20世紀のアフリカを代表する100のベストブックス」についてお話しします。

### 3. 20世紀のアフリカを代表する100ベストブックス

#### (スライド) 20世紀のアフリカを代表する100ベストブックス

国際ブックフェアといえば、ボローニャやフランクフルトなどが有名ですが、アフリカのジンバブエでも開かれています。この「20世紀のアフリカを代表する100のベストブックス」は、2002年にそこで発表されたものです。大人の本が中心ですが、児童文学ではここにある4点が選ばれました。このうち、ハヤブ・アバス・アルホミさんの本は、私も色々調べたのですが、どういう本か分かりませんでしたので、それ以外の本を紹介します。

#### (スライド) Sосу's Call (『ソスの太鼓』) (Meshack Asare. Sub-Saharan Publishers. 1997. 請求記号 Y17-A4902)

Sосу's Call はメシャック・アサレ (Meshack Asare) さんの本です。彼はブラティスラヴァ世界絵本原画展 (Biennial of Illustration Bratislava : BIB) の審査員をやっていて、私も会ったことがあります。

この絵本はガーナが舞台で、ソスは足の悪い少年です。村人の中には、ソスを役立たずだと思っている人もいます。漁師であるお父さんの船に乗せられて海に出た時には、お前のせいで魚が取れなかったと責められたりもします。彼は歩くことができないので、とても悲しいのですが、そのうちに嵐がやってきて、海も陸も大荒れになる。なんとか村の子どもたちを助けたいと思った彼は、太鼓まで這っていき、思い切りその太鼓をたたく。それを聞いて村人たちが急いで戻ってきて、子どもたちは無事だった。太鼓で知らせてくれたのは誰だということになり、それがソスだということが分かって村人たちに感謝される。ソスのおかげでたくさんの命が救われたということで、最後はソスが車椅子をもらうという場面になっています。

アサレさんは1945年にガーナで生まれて、先生などをしながら、絵を描いてきた人です。日本では、次の一冊が翻訳出版されています。

#### (スライド) 『トーヤ 海に行く』(メシャック・エイサー さく、しろたのぼる やく、ほるぷ出版、1976年、請求記号 Y17-5231)

主人公の“Tawia”という名前は、本来「タウィア」と読みますが、「トーヤ」というふうに少し変えられています。それから、“Meshack Asare”は「メシャック・アサレ」と読むのですが、翻訳された当時、英国風にしたのでしょうか、「メシャック・エイサー」と違う読み方になっています。やはりアフリ

カの人たちの名前は、アフリカの読み方で読んだ方がいいと思うのですけどね。

**(スライド) Mamy Wata et le Monstre (『マミワタと怪物』) (Tadjo, Véronique. Nouvelles Editions Ivoiriennes. 1996)**

ベロニック・タジョー (Véronique Tadjo) さんはコートジボワールの女性絵本作家です。この人も、2002 年の子どもの本の世界大会にいらして、お目にかかったことがあります。お父さんがコートジボワール人で、お母さんはフランス人だったと思います。コートジボワールで育ち、絵も描くし、文も書くという人です。

マミワタというのは南アフリカの昔話に出てくる、美しくて親切な人魚です。ある日、怪物が村を襲うという話を聞いて、この人魚が怪物と対決することになります。しかし、怒りに任せてやっつけるというのではなくて、愛を持って接したために、うまく怪物を退治することができたという話で、この絵本が、「20 世紀のアフリカを代表するベストブックス」に選ばれています。

**(スライド) Lord of the Dance (『ダンスの神様』) (Tadjo, Véronique. A&C Black. 1988)**  
**Grand-Mère Nanan (『ナナンおばあちゃん』) (Tadjo, Véronique. Nouvelles Editions Ivoiriennes. 2000)**

**Le Grain de Maïs Magique (『魔法のトウモロコシ』) (Tadjo, Véronique. Nouvelles Editions Ivoiriennes. 2002)**

**Si j' étais roi, si j' étais reine (『私が王だったら、王女だったら』) (Tadjo, Véronique. Nouvelles Editions Ivoiriennes. 1996)**

タジョーさんの作品は、他にはこのようなものがあります。この Lord of the Dance という絵本は、コートジボワールの北部に住んでいるセヌフォの人たちが太鼓に合わせて踊る「仮面の歌」を絵本にしたものです。セヌフォの人たちは、コートジボワールだけに住んでいるわけではなく、マリの南部やブルキナファソにも住んでいます。農耕民族ですが、このように一つの民族が、いくつもの国に分かれて住んでいて、一つの国の中にいくつもの民族がいるということが、アフリカではよくあります。

**(スライド) Stories from a Shona Childhood (『シヨナ人の子ども時代のお話』) (Mungoshi, Charles. Baobab Books. 1989)**

**One Day, Long Ago (『むかしむかしのある日』) (Mungoshi, Charles. Baobab Books. 1991)**

『シヨナ人の子ども時代のお話』は、挿し絵の入った昔話の本で、チャールズ・ムンゴシ (Charles Mungoshi) さんというジンバブエの方が書いて、「20 世紀のアフリカを代表するベストブックス」に選ばれました。著者が子どもの頃に聞いた話を再話しているのですが、「野うさぎとジャングルの動物たち」、「話をするかぼちゃ」など、日本でも少しは知られている話も入っています。右の『むかしむかしのある日』はその続編です。

ムンゴシさんは、1947 年生まれで 16 歳まで学校に行き、その後森林管理の仕事に就きました。アフ

リカではなかなか絵描きや作家では食べていけないということがあるのでしょうか。その後、教科書販売の仕事をするのですが、その教科書を見ているうちに、自分も本を書くようになりました。国際ペンクラブの賞とか、野間アフリカ出版賞も受けています。ジンバブエにはバオバブ・ブックスという昔から子どもの本を出してきた出版社があります。

## 4. アフリカで出ている児童書

### ①言語

#### (スライド) アフリカ分割と植民地

これは 20 世紀初め頃のアフリカがどのように分割されていたか、植民地になっていたかを示した地図です。

アフリカの人たちが出版文化に余り熱心にならなかった理由の一つは、先ほど言ったように口承文芸が非常に盛んだからだと思います。そして、もう一つの理由は、この地図を見ていただくと分かるかだと思います。リベリアとエチオピア以外はヨーロッパの植民地になり、その時、ヨーロッパの国は地図上で線引きをしたので、一つの民族がバラバラになっているいろいろな国に住んでいる、あるいは一つの国の中にいくつもの民族がいるという、そういう矛盾を抱えたまま、1960 年代に独立していきます。

学校教育や子どもの本の出版においては、読み書きのための言語をどうすればいいのか、ということがどうしても問題になります。例えば、私が最初に行ったアフリカの国はナイジェリアなのですが、ここは方言を除いて 250 以上の民族・言語があるとされています。そういう国の初等教育はどうなるかというと、北の方で一番人口の多いハウサ語、東の方で一番人口の多いイボ語、それから西の方で一番人口の多いヨルバ語、この三つのうちのいずれかの言語を使って子どもに教えるのです。残りの多くの民族の人たちは、最初から母語ではない第二言語で教育を受けるということになります。そして、小学校の中学年くらいになると、今度は英語で教育を受けるということになっていくのです。本当は植民地の旧宗主国の言葉というのは使いたくないと思うのですが、使わざるを得ないという状況に置かれています。当然のことながら、教育現場で使われない言語の本はなかなか出版されません。他の国も皆、同じような状態になっています。

例えば、ケニアもイギリスの植民地だったところで、40 以上の民族と言語があります。山間のエンザロ村の小学校でも、いくつかの母語の子どもたちがやってきます。小学校に入った段階の教育は国語のスワヒリ語で行われるのですが、スワヒリ語はそこの人たちにとっては母語ではありません。母語で初等教育を受けることはできないのです。小学校の中学年になると、公用語の英語でも授業が行われるようになります。教育に関係のない言語での本の出版は、コストの点から言っても現状ではなかなか難しいと思います。

旧宗主国の言語以外だと、スワヒリ語はいくつかの東アフリカの国で国語や公用語とされているので、本もたくさん出版されていて、比較的手に入りやすいです。

## ②口承・昔話

### (スライド) アフリカで出ている児童書

アフリカで出版されている児童書について、いよいよ見ていただきたいのですが、まず昔話の本というものがたくさん出ています。私も、アフリカで出版された昔話の本をたくさん持っていますが、今回は、大人向けに出ているものではなく、子ども向けに出ているものを主に紹介していきたいと思います。

従来も外国人や日本人の学者たちが、昔話を収集して出版するという事は、結構行われていたと思います。でも今は、アフリカの人たちが、自分の出身地の人たちの昔話を自分たちで集めて本にするという段階に入っています。場の雰囲気や歌やリズムなどもちゃんとわかったうえで昔話を集めようとしているアフリカの人たちの生の声に耳を傾けることが、これからは必要なのではないかと思います。

(スライド) Hare and Hornbill (『ノウサギとサイチョウ』) (p' Bitek, Okot. Heinemann Educational, 1978)

Three Solid Stones (『三つの硬い石』) (Mvungi, Martha. Heinemann Educational, 1975)

どちらも、アフリカン・ライターズ・シリーズ (African Writers Series) といって、Heinemann Educational という、アフリカに支社がある出版社から出された本です。

オコト・ビテック (Okot p'Bitek) はウガンダの詩人で、アチョリ人です。この Hare and Hornbill は日本でも翻訳が出ていました (『のうさぎとさいちょう』オコト・ビテック著、北村美都穂 訳、新評論、1998年、請求記号 KM52-G2)。今は絶版になっていると思います。彼はこの本の前書きで、「これまでは、西洋の学者がアフリカ人の昔話を集めてきたけれども、そのやり方は昔話が持つ雰囲気やリズムを少しも伝えていない。だから、自分の民族の昔話というのを自分で集めることにした」と言っています。オコト・ビテックは、他にも『ラウィノのうた』(Song of Lawino, 1966)、『オチョルのうた』(Song of Ocol, 1970) (『ラウィノの歌／オチョルの歌』オコト・ビテック著、北村美都穂訳、新評論、2000年、請求記号 KS167-G244) の翻訳が、新評論から出ています。

右の本 (Three Solid Stones 『三つの硬い石』) は、マーサ・ムブンギ (Martha Mvungi) が、タンザニアの南部に暮らすへ人となベナ人の昔話を再話したものです。マーサ・ムブンギは、この地域に生まれて、この本が出た当時は、ダルエスサラーム大学の教育学部で教えたり、調査・研究を行ったりしていました。このシリーズは、子ども向け専門に出しているわけではないのですが、子どもが読んでもとても面白いと思います。特に「ノウサギとサイチョウ」という話は、とても面白くて、本当はここで紹介したいのですが、時間がないので省略します。

(スライド)

Twilight and the Tortoise (『たそがれ時とカメ』) (Akinsemoyin, Kunle. African Universities Press, 1971)

Revealer of Secrets (『秘密をあばく者』) (P. Bordinat & P. Thomas (ed). African Universities Press, 1975)

この二つは、ナイジェリアの African Universities Press という出版社が出している子ども向けの本です。学校で使う副読本としても使えるようにという意図から、学習の手引きのようなものがついています。クンレ・アキンセモイン (Kunle Akinsemoyin) はお役人ですが、昔話の再話も行っていました。この本は、後で見ていただくと分かりますが、印刷・製本の技術はまだまだでも、一所懸命に頑張ってお本を出していることがよく分かります。Twilight and the Tortoise の序文で、アキンセモインは次のように言っています。

ナイジェリアの日暮れ時はお話の時間です。太陽が沈むと、まもなく夜の闇がやってきます。その昼と夜の間の時間に、子どもたちがストーリーテラーのところに集まってきて、お話をせがみます。子どもたちの多くは、家の手伝いをして疲れていますが、それでも寝る前にお話が聞きたいのです。ストーリーテラーはスツールに腰を下ろすと、子供たちはその周りのござの上に座ります。最初は、ストーリーテラーが「アロー・オー」と声をかけます。すると、集まった子どもたちも、「アロー・オー」と返します。

「アロー・オー」とは、「用意はいいか？もうすぐ始まるぞ」という意味です。この人は多分ヨルバだと思うので、ヨルバ語でのやりとりだと思うのですが、これが何度か繰り返された後、ストーリーテラーがなぞなぞを出して聞いている側が答えます。例えばこんなふうです。

「王様をチクッと刺すのはなんだ？」

「針」

「王様に敬意も示さず、宮殿に入ってくるのはなんだ？」

「洪水」

「よばれもしないのに、王様と一緒にご飯を食べるのは小さいものはなんだ？」

「はえ」

子どももよく知っているなぞなぞなのでしょう。こうしたやりとりが終わると、いよいよ物語が始まります。その物語を集めたのが、この Twilight and the Tortoise です。

それから右の本 (Revealer of Secrets) は、ナイジェリア大学の学生たちが、それぞれ自分の故郷に帰省したとき母語で語られる物語を集めて持ち寄ったところ、300 以上お話が集まった。そのうち 22 編を選んで本にしたものです。編集したのは、当時の教員だと思うのですが、採集したのは皆、ナイジェリア人の学生です。この本にも、序文にこのようなことが書いてあります。

昔話は、ナイジェリアではまだ娯楽や教への役割を果たしていますが、だんだんにラジオ、テレビ、映画、本、新聞などに押されて消えていきつつあります。そこで、昔話の収集も盛んに行われるようになってきました。とはいえ、文字に印刷されたものは、月の光、夜の空気、家族の愛情、一日の仕

事が終わっての心地よい疲れ、などといった雰囲気まで伝えることはできません。ストーリーテラーのリズムのいい口調や歌も、文字では十分に伝えることができません。

このように、限界はあるのですが、それでもその民族の人たちが自分の地域の昔話を集めたと言っています。本文は、1が「伝説」、2が「動物・昔話」、3が「人間と超自然の物語」、4が「ことわざ」というふうに分かれています。

**(スライド) Some Popular Ananse Stories (『よく知られたアナンシの物語』) (Nannah Dankwa-Smith. Heinemann Educational Nigeria, 1975)**

**The Wise Fool (『賢い愚者』) (Nannah Dankwa-Smith. Heinemann Educational Nigeria, 1975)**

左の本にはクモのアナンシの話が載っています。アナンシというのは、日本でもストーリーテリングを行う方たちの間で人気があり、アフリカ中にアナンシの話があるのではないかと思っている人もいますが、そうではなく、もともとはケニアのアシャンティ地方の昔話です。アフリカの昔話にはトリックスターがよく登場しますが、クモのアナンシもそのトリックスターのひとりです。著者はガーナ人の教師で、ガーナの放送局でアナンシ物語の放送にも携わっていました。元の本はガーナの Watervill Publishing House というところから出たのですが、私が持っているのはナイジェリア版です。

それから、右の本 (The Wise Fool 『賢い愚者』) も今日持ってきています。ザンビアの教育大臣だった人が、自国の子どもたちのために昔話を再話したものです。教育関係ばかりでなく、大人の本を書いている作家も、子どものために物語を書いています。それには次のような背景があります。

植民地時代やそれ以降でも、子どもたちが学校で習ったのは、旧宗主国の文学でした。例えば、Wordsworth (ワーズワース) の The Daffodils (水仙) という詩だったりするのです。「水仙」は有名な詩ですが、イギリスの湖水地方に群生する水仙が風にそよいでいる情景を詩にしています。しかし、そういう光景はアフリカにはないので、情感がわいてこない。だからアフリカの人たちは、子どもたちにはアフリカの子どもにふさわしい文学や物語を出していかなければいけない、伝えていかなければいけないと言って、昔話を本にする、あるいは創作物語を作るということをしているのです。

そういう本を日本でそのまま翻訳して出せるかというと、そう簡単ではありません。なぜかという、書き言葉には書き言葉の語り方、プロットの作り方というのがあるのだと思うのですが、そういうものに習熟している作家ばかりではないので、特に子どもの本の場合、そのまま出すことがなかなか難しいのです。もちろん昔話の中には、日本で紹介できるものがたくさんありますが、創作物語だと、語り口調のままに書かれていることも多いので、例えば、死んだはずの人がなんの説明もなくまた登場してきたりすることもあります。語りを聞くならそれもありかもしれませんが、活字になるとおかしなものになってしまいます。でも、アフリカの子どもにはアフリカの物語を、ということで一所懸命作っているのがこちらにも伝わってきて、それが私は素敵だなと思っています。

**(スライド) The girl who couldn't keep a secret and other stories (『秘密を守れなかった少女**

**ほかの物語』(Clare Omanga. East African Publishing House, 1981)**

**Swahili Sayings (『スワヒリ語のことわざ』(S. S. Farsi (ed). Kenya Literature Bureau, 1991)**

左の本も、昔話です。著者はオマンガ (Clare Omanga) さんという方で、西ケニアのキシイから初めてセカンダリスクールに進学し、後にナイロビでビジネスをやっていた女性です。結婚した相手がケニア政府の環境大臣だったということで少し余裕があり、昔話の本を自分たちの子どものために、ということで書かれたものだと思います。

それから、右の本は、『スワヒリ語のことわざ』というもののなのですが、最初はスワヒリ語だけで出ていました。ザンジバルのことわざを集めているのですが、ザンジバルというのはスワヒリ語が母語の人がたくさんいるところなんです。今は1巻も2巻も英語との併記になっています。2巻はなぞなぞと迷信が収録されていて、アフリカでもこういう本が出されるようになってきているのだなと思いました。

**(スライド)**

**The tales Wamugumo (『ワムグモのお話』(Peter Ngibuini Kuguru. Phoenix Publishers, 1988)**

**Tortoise and the Magic Stick (『カメと魔法の杖』(Isah Jimoh. Lantern Books, 2008)**

左の本はキクユの人たちの間に伝わる昔話の本ですが、体はとて大きくて強いという伝説のストーリーテラー「ワムグモ」が語っているように書かれています。

右は、この間、ナイジェリア人の友人に買ってきてもらったうちの一冊です。これも昔話シリーズなのですが、挿絵がアメリカ漫画ふうになっていることにご注目ください。

**(スライド) When Hippo was Hairy (Nick Greaves 文、Rod Clement 絵、Struik Publisher. 2000)**

これは南アフリカで出ている本なのですが、やはり昔話です。これも、とても面白いなと思いました。動物が出てくる昔話を集めてありますが、その動物の科学的な説明、つまり、体の大きさがどのくらいで、体重がどのくらいで、どんなところに住んでいて、どんな生態か、という説明もついていて、架空の世界と現実の世界が同居している少し不思議な本です。南アフリカの本なので、印刷もきれいです。

**(スライド) Folktales from the Moose of Burkina Faso (『ブルキナファソのモシ人の民話』(Sissao, Alain-Joseph. Langaa Research & Publishing, 2010)**

**The Egg Polister and Other Tales (『卵磨きとその他のお話』(Ayuninjam, Funwi F.. Langaa Research & Publishing, 2010)**

これらはカメルーンの Langaa Research & Publishing という出版社から出ている新しい本です。左は『ブルキナファソのモシ人の民話』で、右(『卵磨きとその他のお話』)は、カメルーンの北西に暮らす人たちの昔話です。どちらも、その地域に生まれ育って、現地の言葉が分かるアフリカ人の人が採集・編集しています。こういう本が今は増えています。日本でも、ヨーロッパ人が集めた昔話ではなくて、こういう本を翻訳出版できるようになるといいなと思うのですが。

次に少し変わった作品をお見せします。

(スライド) Leuk-le-Liévre (『ノウサギのルク』) (L. Senghor & A. Sadji 再話、Marcel Jeanjean 絵、  
Librairie Hachette, Paris, 1953)

Sungra Kisimani (『泉の中のノウサギ』) (Leah Mgonja 再話、Eastern Africa Publications, 1992)

1953年に出た『ノウサギのルク』を再話しているのは、レオポール・セダール・サンゴールという、セネガルの初代大統領です。詩人でもあり、文学者としてもとても有名で、Négritude (ネグリチュード) という黒人固有の文化を称揚する運動のリーダーでもありました。その人が、アフリカの子どものために、トリックスターのノウサギの話を集めて本にしたのがこれです。最初からフランス語で出ています。この本にはお勉強の部分もあって、新しく出てきた単語の発音を試みようとか、動詞の活用を書いてみようとか、「この時、ノウサギはどう思ったのでしょうか」などといった設問があったりするので、そういうところも見ていただくと面白いです。

右は、私が1993年くらいにタンザニアに行った時、手に入れたスワヒリ語の昔話の本です。本屋に行くと子どもの本はないかと思って探したところ、その時はこれ一冊しかありませんでした。とても有名な昔話で、先ほど紹介したチャールス・ムンゴシさんの *Stories from Shona Childhood* (『ショナ人の子どもの時のお話』) の中にも——こちらはジンバブエのお話ですが——同じタイプの昔話が入っています。あちらこちらでよく見かけるお話なんですね。

どういう話かというと、飢饉になるのです。日照りになって、何にも食べるものがなくなってしまう。それで、動物たちが集まって相談をして、井戸を掘ろうということになります。挿し絵は、このような井戸が書いてありますが、地域によって、いろいろな形があると思います。井戸を掘るということで相談がまとまって、今日は誰々と誰の当番と決めて、毎日交代で井戸を掘ります。ところが、ノウサギは家で寝てばかりで作業に全く出てこない。「あいつは何をしているんだ」「役に立たないやつだ」と動物たちは怒ります。そのうち、とうとう水がわいてきます。そこで、動物たちは集まって、こういう相談をするのです。あのずる賢いノウサギは、働かなかったのに水は汲みにくるだろう。水をやらないようにするにはどうしたらいいかということで、動物が代わる代わる見張りに立つことにします。

例えば、あるバージョンではキリンが見張りに立っています。夜になると、ノウサギがやってきます。そして水を汲もうとすると、やっかいなことに自分より大きな動物が番をしています。でも、ノウサギは見張り番の動物たちを、いろいろな方法で欺きます。ここがとても面白いのです。キリンの場合を言いますと、ノウサギは、見張り番がいると見てとると、「お前たちのけちな水なんかいらぬもんね、ぼくは天からもらった、ものすごく美味しい水を持っているんだからね」という歌を歌います。最初、キリンは「そんな手にのるものか」と思っています。「どうせあいつはだましにきたに違いない」と。でも、ノウサギは余りにも歌が上手く、言葉も上手い。キリンはそのうちふらふらと、「ひょっとしたら、あれは本当においしい水かもしれない、一度飲んでみたいな」と思ってしまうのです。そうなる、もう一貫の終わりです。ノウサギは、「これはね、天からもらった水だから、上から口を開けて、上から飲ませてあげないと、本当のおいしさは分からないのだよ」と言います。「でも、これを飲むとね、お酒を飲んだみたいに頭がフラフラして酔っ払っちゃうから、そのままでは駄目だね。だから、僕があそこにあ

る木に登って、上からこの水を垂らしてやるから、君はちょっと木のそばにおいで」と言い、さらに「ふらふらするといけないから、その長い首は木に縛りつけておこう」と言うのです。キリンはまんまとその手にのって、首を木の幹に縛られてしまいます。もちろん、縛った途端にノウサギは一目散に走って行って、水を汲んで、家に帰ってしまいます。次はライオンが番をする、次はゾウが番をする、と進むのですが、全部だましていきます。このノウサギは悪いやつなので、そのうちに水を汲むだけではなくて、体は洗うわ、中でおしっこはするわ、うんちはするわ、大変なことばかりやるのです。

このようにトリックスターの本領を発揮するわけですが、日本の昔話の場合だと、働きもしないし共同体の利益をそこなう悪いノウサギは、きっと懲らしめられて終わるでしょう。しかし、アフリカの昔話では、トリックスターは逃げるのです。地域によっておわり方はいろいろなバージョンがあるのですが一カメがノウサギをとうとうつかまえる、というバージョンもあります—、とうとうノウサギが捕まったとしても、そこからまた逃げ出します。最後まで逃げおおせるのが、アフリカのトリックスターなのです。トリックスターのノウサギの話はアフリカのあちこちにあります。

### ③絵本

**(スライド) The Clever Hare and the Terrible Lion (『賢いノウサギと怖いライオン』) (Godfrey Brown 文、Prue Theobalds 絵、African Universities Press、1970)**

これは絵本ですが、日本の絵本のイメージを抱いていらっしやると、ちょっと違うかもしれません。1986年に東京で子どもの本の世界大会があった時には、アジアやアフリカからいらっしやっていた方が、「子どもの本を出すというのは、やはりお金がとてまかかります。インクも高い、紙も高い、そして印刷機も高いので、そんなにたくさん本を出すことはなかなかできないのです」とおっしやっていたのが印象的でした。この絵本も、日本の基準で考えると安い紙に素朴な印刷がしてあります。

#### **(スライド) 9冊の昔話絵本**

これは、ナイジェリアの African Universities Press——先ほども紹介した出版社です——が出した絵本です。アフリカのいろいろな国の昔話を集めた12冊のシリーズだと思うのですが、私は10冊だけ持っていて、今日持ってきました。学校のサブテキスト使っていたのだと思います。出版当時はまだ、「アフリカは一つ」という意識がかなりあった時期だと思うので、ナイジェリアの昔話を紹介するだけではなくて、いろいろな国の昔話をシリーズで紹介しているのです。表紙にアフリカの地図があって、例えば、ザンビアというのはここだということを白で表して、こちらにはキーワードが文字と絵で紹介してあります。アフリカの多くの地域にトリックスターの話があります。ノウサギがいちばん多いと思いますが、ある地域ではカメレオンだったり、ある地域は、先ほどのアナンシのようにクモだったり、あるところではカメだったりもします。

アメリカの新聞記者だったジョエル・チャンドラー・ハリス (Joel Chandler Harris) は——この人は白人なのですが——、南部の黒人が奴隷から解放された時に、黒人奴隷の間を回って昔話を聞き取って、本にしました。それが『リーマスじいやの昔話』という本なのですが、それを見ると、このアフリ

カの本に出て来るような話と全く同じ構成の話が登場しています。アメリカの奴隷は文化を奪われていて、読み書きさえ学ぶことができなかつたので、昔話を語ることによってアイデンティティを確認したり、ルーツを伝えたりしていたのではないかと思います。ただし、アメリカのはノウサギ hare ではなくウサギ rabbit になっていたり、蜜蝋がタールになっていたりします。

このアフリカの昔話絵本シリーズは、ケニア、チャド、コンゴ、マダガスカル、ナイジェリア、シエラレオネ、ウガンダ、このシエラレオネの話——これはとても面白い、いびきの話です——から、ザンビア、ウガンダ、ボツワナ、エチオピアというように、アフリカ各地の昔話を、アフリカの子どものために紹介しています。二色の挿絵や写真も付いています。

**(スライド) How the leopard Got His Claws (『ヒョウにはどうして爪があるのか』) (Chinua Achebe & John Iroaganachi 文 Adrienne Kennaway 絵、East African Publishing House、1976) (Chinua Achebe & John Iroaganachi 文 Mary GrandPre 絵、Candlewick Press、2011)**

これは、世界文学全集などにもアフリカの作家代表として登場するチヌア・アチェベ (Chinua Achebe) が子どもの本として一番初めに出した本です。最初、ナイジェリアの Nwamife Publishers というところで出版されたのですが、左は、私が持っているケニアで出版された絵本のバージョンです。そして、右は、最近アメリカで出版されたやはり絵本です。内容は、『ヒョウにはどうしてかぎ爪があるのか』という動物昔話です。

**(スライド) Little Chick (『ひよこ』) (Jean Boothman、Lake Publishers & Enterprises、1993)**

これを絵本と言えるのかと思う人もいるかもしれませんが、Lake Publishers & Enterprises という出版社が出している絵本です。この出版社はビクトリア湖のほとりにあって、とても一生懸命本を出しているところなのです。これは『ひよこ』という絵本なのですが、中はこのような感じですが、これはもしかしたら、マザーグースにヒントを得たのかなという感じもしているのですが、登場するのはアフリカのものです。

ひよこがパパイアの種を喉に詰まらせてしまい、何とか水を飲ませなければならないということで、お母さんのめんどりが川に水を汲みにいきます。「水をちょうだい」と川に言うと、「それにはコップ替わりの木の葉が必要だね」と言われたので、今度は木の葉を取りに木のところに行きます。すると、木は「人間に揺すってもらわないと葉っぱが落ちないよ」と言うのです。そこで、めんどりが人間の男に頼みに行くと、男は「ただじゃ働けないね、牛のミルクを持ってきて」と言います。そして、牛のところに行くと、牛も「ただじゃミルクをあげられないから、サトウキビを持ってきて」と言います。サトウキビのところに行ってようやく、くちばしを使って自分で倒すことができました。今度はそれを牛のところへ持って行く。そこから逆方向の流れが生じ、最終的にひよこは水を飲むことができ、めでたしめでたしというものです。この絵本は、とても安いわら半紙のような紙に一色で印刷されているのですが、この絵本の全ての印税は、ろうあ者のための学校に支払われるようになっています。アフリカの出版社もそういう活動をしているのです。

**(スライド) Long Long Ago (『むかしむかし』) (Pamela Aba Woode 文 Kobina Ofori Payin 絵、West African Book Publishers、2001)**

これは『むかしむかし』という絵本ですが、どうしてネコはペットになりブタは食料になったのかという由来を語る昔話絵本で、ナイジェリアで出ています。ネコはきれい好きで静かだけれども、ブタはきたなくてうるさいから、そうなったのだよということを言っています。でも、ブタって本当はきれい好きなのですよ。だから、ブタが聞いたら怒るかもしれません。

これは見てもらえば分かると思いますが、印刷の品質がまだまだです。裏写りしていますが、一所懸命子どもの本を出しているというのが分かります。

**(スライド) Red (『あか』) (Sue Kramer 写真 Reviva Scherbrucker 文、PRAESA、2004)**

これは、南アフリカに行った時に買った写真絵本です。フルカラーで印刷されていて、Little Hands というとても小さい絵本シリーズの1冊です。

後でまた少し別の観点からお話したいと思うのですが、PRAESA (Project for the Study of Alternative Education in South Africa) が出しています。アパルトヘイトの時代には人口の7割を占めていた黒人たちは人権を全く無視されていたわけですが、普通選挙が実施されるようになった今は「虹の国を作ろう。いろいろな民族の人たちが一緒に暮らしていく国を作ろう」ということになりました。これは Red という本なのですが、見ていただくと、いろいろな人種の人が登場するのが分っていただけだと思います。

**(スライド) 他の “Little hands”**

他にも私が持っている “Little hands” の本を何冊か持ってきていますので、後で見てください。

**(スライド) The Rights of a Child (『子どもの権利』) (Tyrone Appollis Faiza Galdhari, Piet Grobler, NkoaliNawa, Véronique Tadjó 絵、Kwela Books、2004) : 表紙**

それから、面白いのはこの本です。1959年に国連で採択された「子どもの権利宣言」10項目を絵本にしたものです。

**(スライド) The Rights of a Child : 本文**

中を見ていただきます。これは8番目の見開きですが、「子どもの権利宣言」の「子どもはあらゆる状況において、最初に保護および救済を受ける者に含まれなければいけない」という部分です。絵本ではもう少しシンプルにして、「子どもは、困った時や危険な目にあった時は助けてもらう権利がある」という文章になっています。左には、ピート・フロブラー (Piet Grobler) さんという、南アフリカの画家が描いた絵があり、右側には、このように11の窓が開いていて、窓の一つ一つに今の文章が11の言語で印刷されています。なぜこのようになっているのかというと、南アフリカは民主化された時に、そ

れでは公用語はどうしようかということになりました。アパルトヘイト時代に教育現場で強制されていたアフリカーンス語は、オランダからやってきた植民者が使っていた言語です。それを新生南アフリカの国語とするわけにはいかない、英語もアフリカの言葉ではない。では、どうしようかということになったのです。ただ、南アフリカはとてもラッキーなことに、公用語を 11 にすると、ほとんど全ての人が自分の母語で教育を受けることができるのだそうです。もっとずっと母語の数が多いナイジェリアとかタンザニアよりは、ラッキーとも言えると思います。

それで、右ページの窓の中の一つ一つには、「困った時や危険な目にあった時は助けてもらう権利がある」という文章が 11 の公用語で書いてあります。水色は人口比 13.3%のアフリカーンス語、ピンク色は人口比 8.2%の英語で、薄いオレンジ色は人口比 1.6%のンデベレ語、黄色は 17.6%のコーサ語、青緑は人口比では 23.8%といちばん多いズールー語、赤は 9.4%のペディ語——北ソト語とも言います、灰色は 7.9%のソト語で、藤色は 8.2%のツワナ語、朱色は 2.7%のスワジ語、深緑色は 2.3%のヴェンダ語、紫色は人口比 4.4%のツォンガ語でということで、それぞれの窓に、それぞれの言語が入っています。これは南アフリカにおける人口比であって、今言った人たちは、他の国にも住んでいます。

**(スライド) Mhlanguli (『ムラングリ』) (Sue Kramer 写真 Reviva Scherbrucker 文、ELRU、1998)**

南アフリカのケープタウンには、カエリチャというタウンシップがあり、私はこのタウンシップにも行きました。そうしたら、ちょうど家を立てている人がいて、どうやっていたかという、このくらいの太さの柱を地面の上に四つ立てて、その間にベニヤ板や段ボールなどで壁を作っていました。トイレはありません。もちろん、お金持ちのところにはトイレもありました。でも、普通の家にはないので、道路の向こうに何にもない小山があったのですが、そこに行って用を足すとのことでした。道路はいつも車が通っているので、子どもには危ないと思ったのを覚えています。

この本は、コーサ語、ツワナ語、英語、アフリカーンス語と 4 つの言語で書かれています。11 の公用語の中の 4 つですが、すべての本を 11 の言語で出すというのではなく、出版された地域で主に使う言語をいくつか並記してあるのです。

南アフリカの ELRU つまり "Early Learning Resource Unit" というところが出版していますが、Anti Bias Project といって、子どもに偏見を持たせないようにするシリーズの一冊です。これは、カエリチャに暮らす少年を主人公にした写真絵本ですが、このシリーズは、いろいろな地域に住む、いろいろな子どもたちを紹介しています。

**(スライド)**

**Quand je serai grand (『大きくなったら』) (Cyprien K. M. Akuete 文 Karim Diallo 絵、EDICEF、1999) : マリ**

**When I grow up (『大きくなったら』) (Cyprien K. M. Akuete 文 Karim Diallo 絵、New Africa Books、2001) : 南アフリカ**

これは、もともとフランス語で出た絵本が英語でも翻訳出版されている例です。大きくなったらいろ

いろいろなことができるようになるから、早く大きくなりたいなという内容の絵本なのですが、最初はマリの出版社から出されました。それが左ですね。それが、ガーナの African Christian Press というところから英語で出て、その後、この南アフリカ版が出ています。私が持っているのはこの南アフリカ版です。

**(スライド) The Watermelon (『スイカ』) (Gill Bond、Songololo Books、1994)**

これも、私が持っている本をスキャナーで読み取って御紹介しています。ジンバブエで最初に出て、南アフリカでその後出たというものです。英語、ズールー語、コーサ語の 3 言語が並記されています。

**(スライド) Ukuti Ukuti (『ウクチウクチ：スワヒリの子ども歌』) (Excel Michael Haonga ほか編ザンジバルの子どもたち絵、Mkuki na Nyota、2010)**

こういうものもあります。最近出た本なのですが、ザンジバルの子どもたちが絵を書いており、スワヒリ語の子ども歌が楽譜付きで紹介されていて、スワヒリ語と英語で歌の意味も書かれています。これには CD が付いているので、後で時間があったら聞いていただければと思います。

#### **④読物**

**(スライド) アフリカで出ている児童書 3**

まだまだ絵本もたくさんあるのですが、全部紹介しているときりがないので、次は、読物の本です。

**(スライド) Chike and the River (『チケと川』) (Chinua Achebe、Cambridge Univ. Press、1966)**

**Chike and the River (『チケと川』) (Chinua Achebe、Anchor Books、2011)**

こちらはチヌア・アチェベ (Chinua Achebe)、先ほど紹介した、ナイジェリア人のとても有名な作家です。これは子どものために書いた本で初版です。彼はナイジェリア人なのですが、最初は南アフリカで出版されていました。

ナイジェリアにオニチャという町があるのですが、そこはオニチャ・マーケットといって、とても有名な市場があるところです。そして、ここではビアフラ戦争で破壊されるまで Market Literature と呼ばれる安くて薄い本を売っていました。昔から、ニジェール川のほとりにあるオニチャは、交易や文化の中心地の一つだったのです。そのニジェール川には渡し舟があります。田舎からオニチャに出てきた少年の Chike (チケ) は、向こうに渡りたいなと常々思っているのですが、お金がないので渡ることができません。では、どうやったらお金が手に入るだろうかと考えました。よくアフリカの子どもがやっている小銭稼ぎは幾つかありますが、そのうちの一つは、スーパーマーケットなどのお店の前で待っていて——買い物をするわけですから、お店に来るのはお金を持っている人だけです——、やってきた人たちの車の窓を雑巾のようなもので拭いて、きれいになったからと言ってお小遣いをもらう、というのがあります。チケも、フェリーでニジェール川を渡ろうとしている人に「これからあなたはラゴスに行くのでしょうか？ラゴスというのはもっと大きな都市だからこんな汚い車では駄目でしょう」などと言って

車を磨き、それでお金をもらいます。そのお金を貯めて、ようやく川の向こう側に渡ることができました。

ところが、向こうに渡っているいろいろなものを見ているうちに時間を忘れて、帰りの最終フェリーが出てしまい、家に帰ることができなくなってしまうのです。不安と恐怖に駆られながら闇に潜んでいると、たまたま泥棒が相談しているのを聞きつけます。盗みに入る計画を聞いてしまうのです。チケは、無実の人が捕まりそうになった時、勇気を奮って、本物の泥棒を指してこの人が真犯人ですと言うのです。それで、めでたしめでたしとなります。

こちらは、同じ物語を 2011 年にアメリカで出した本です。挿絵を見ると、とてもモダンですね。この場面に鶏の絵が描かれているのは、盗みの計画を知ったチケが、一味から離れて番小屋のようなところに隠れていて、早く朝にならないかと思っているところに、ようやく鶏が鳴いて朝になってきました、という、少し気分が上向いてくる場面です。

**(スライド) An African Night' s Entertainment (アフリカの夜の楽しみ) (Cyprian Ekwensi, African Universities Press, 1962)**

**An African Night (アフリカの夜の楽しみ) (Cyprian Ekwensi, Heinemann Kenya, 1990)**

著者のシプリアン・エクウェンシ (Cyprian Ekwensi) はナイジェリアのイボ人の作家です。古典と言われている有名な作品ですが、子どものための物語で、冒頭にストーリーテリングの場面があります。ストーリーテラーの人が村にやってきて、村の人たち、子どもたちを皆集めて、「これからお話をするよ」と言うのですが、その時に、皆に小銭を置きなさいと言います。「私がこれから長い長いお話をするから、最後まで寝ないで聞いていた人は、このお金を全部もらえるよ」というわけです。これが前段で、お話が始まります。冒険物語なので、とてもワクワクドキドキするはずなのですが、話し終わってストーリーテラーが聴衆を見渡すと、皆、丸くなって寝ているようです。そこで「あ、寝ちゃったのかな。じゃあ、このお金は私がもらっていくよ」とストーリーテラーが言うと、村人たちが寝たふりをしていただけで実は皆ちゃんと聞いていて、「そんなことはできないぞ」と口々に言う、というところで物語が終わります。昔話の伝統から、やはりこういう創作物語も生まれてきているのだなということが分かる作品ですね。

こちらはナイジェリアで、右はケニアで出たものです。このように古典になっている本、つまりエクウェンシの本やアチェベの本などは、現在いろいろな国で出版されています。

**(スライド)**

**Story time (おはなしの時間) (Barbara Baddoo, West African Book Publishers, 2009)**

**Tales of the Iroko Tree (イロコの木のお話) (Obi Opara 文 Ibrahim Hamid 絵, Lantern Books, 2008)**

こちらにもストーリーテリングの場面から始まる Story Time という本です。内容は昔話ではなく創作だと思いますが、おばあさんが子どもたちを前にして、さあ、これからお話が始まりますよと言ってい

る場面が最初にあります。

右の本は、昔話ではなく冒険物語なのですが、やはりおじいさんが昔話をしている場面から始まっているということからも、アフリカというところが、口承の文化を根強く持っているということが分かると思います。ナイジェリア人の児童文学の研究者で、大阪国際児童文学館で研究員をされていたオセイ ウェンス・オサ (Osayiwense Osa) さんに東京でお目にかかった時に、「日本は、文字の文化と声の文化と、どちらが強いですか」というのが最初の質問だったので、私は「え？」と思ったのですが、アフリカの人がこういう質問をするのは当然のことなのですね。

(スライド)

**Moses (モーゼズ) (Barbara Kimenye, OUP Nairobi, 1968/96)**

**The Rich Boy and the Poor Girl (金持ちの少年と貧乏な少女) (Eze Nnaemeka C., Nani Boi Production, 2009)**

両方ともリアルな日常の物語です。左は Moses という本で、「世界の児童文学」といった本では必ず紹介されている古典です。著者のバーバラ・キメニエ (Barbara Kimenye) さんは、ウガンダの作家です。15歳の、学校をいくつも退学になるようなワルが主人公です。YA 小説といえると思います。

右の本は今出ているナイジェリアの YA 小説です。この作品の主人公は 17 歳なのですが、この本が面白いのは、挿し絵がわりにモノクロの写真が使われていることです。登場人物の役をする人たちが演技をしてポーズをとり、それを写真にして使っています。

この作家のエゼ・ナイメカ・C (Eze Nnaemeka C.) さん——C は Charles だったと思います——は、この出版社でとてもたくさん本を書いている作家です。

(スライド)

**Waiting for Rain (雨を待つ) (Lesley Beake ほか, Maskew Miller Longman, 2002)**

**Their Voices Their Stories (彼女たちの声と物語) (Bethsaida Orphan Girls' Secondary School, Mkuki na Nyota, 2009)**

昔話や学校物語以外の、面白い作品を紹介していきます。

これは、レスリー・ビーク (Lesley Beake) さん——『バオバブの木と星の歌』(小峰書店)を書いた作家なのですが、この方にも私は 2002 年にお会いしました——の Waiting for Rain という作品です。サンとかブッシュマンとも呼ばれるアフリカの先住民の人たちの暮らしや文化を紹介しています。ビークさんは先住民の人たちのサポートもしています。南アフリカの出版社から出ています。

それから右は、孤児が学ぶ寄宿学校の女の子たちが書いたお話を一冊の本にしたというものです。タンザニアで出ています。

(スライド)

**Mwana Mdogo wa Mfalme (星の王子さま) (Antoine de Saint-Exupery, Mkuki na Nyota Publishers,**

2010)

**Akuko Ufodu Shakespeare Koro (シェークスピア物語) (Okoro Anezi, Nwaobiara Chukwueah [訳]、Fourth Dimension Pub.、2004)**

この2冊もおもしろいですね。左は『星の王子さま』のスワヒリ語訳です。それから右の『シェークスピア物語』のイボ語訳です。『シェークスピア物語』というのは、イギリスのチャールズ・ラム (Charles Lamb) とメアリー・ラム (Mary Lamb) が、シェイクスピアの戯曲を子ども向けの物語にしたものですが、それをイボ語で出しています。イボ語というのはナイジェリアの三大言語なので、東の地域の人には小学校で習う言語です。

## 5. 子どもの本に関するいろいろな試み

最後に、子どもの本に関するいろいろな試みを紹介しておきたいと思います。

### (スライド) ケニア：ラクダの図書館

これは、ケニアのラクダの図書館です。ケニア北東のガリッサという辺りで、ラクダの図書館が活躍しています。国立の図書館がラクダを12頭飼っているのですが、それをを3つか4つのグループに分けて、12の地域を巡回しています。先頭のラクダが2つ箱を背負っていて、一つの箱の中に200冊本が入っていますので、全部で400冊を一度に運べるわけです。二頭目や三頭目は、日陰を作るためのテントや、図書館員の人たちが自分で食べるお弁当や水などといったものを積んでいます。子どもたちはラクダの図書館の到着をいつも待ちわびていて、子ども一人が一回に二冊ずつ、本を借りることができます。そして、また二週間経つと、同じラクダのグループが回ってくるので、借りていた本を返して、新しい本を借りるというわけです。この地域には遊牧生活をしている人がまだ多いので、識字率は15%くらいとかなり低いのです。また、この地域の人たちはソマリ語を使うのですが、ソマリ語で出版されている本は少ないという問題があります。でも、学校に行っている子どもは他の言語で学んでいるので、本を借りて読むことを楽しみにしています。ケニアの大統領は、義務教育を無償化すると言って当選したのですが、教科書の数は足りないし、先生の数も足りない。スローガンだけが先にあったので、いろいろな問題が起こっています。

### (スライド) ロバの図書館：ジンバブウェ／エチオピア

これはロバの図書館です。ジンバブウェとエチオピアなのですが、右の図書館には、ソーラーパネルが載っています。本当に辺鄙なところの人たちは、今もインターネットが使えないのですが、電気が引けていなくても、インターネットでいろいろな情報が入るよということなので、このロバの図書館は、インターネットもできるようになっています。

### (スライド) 母語での出版—ケニア、南アフリカ、ルワンダ

ここで紹介しているのは、母語での出版です。ケニアの **Moran Publishers** というところが出しています。ルオ語、キクユ語、それからカンバ語といろいろあるのですが、そのうちのごく一部をここで紹介しています。だんだんに、このような母語での出版というのもできるようになってきているんですね。

右に3つ並んでいるのは、ルワンダの **Bakame** (バカメ) という出版社の本です。ルワンダというのは、ジェノサイドがあったところですよ。この出版社は、スイスに亡命した女性が作った出版社です。だから、こんなふうに色もきれいで出ているのです。そして、これはルワンダ語なのですが、このようにいろいろな言語で本が出ています。

それから、南アフリカもとても頑張っています。**Kagiso Readers** というシリーズがあって、いろいろな母語で出しています。いろいろな母語というのは、南アフリカは公用語が11で、そのうち、アフリカーンスと英語では、これまでもたくさん本が出版されてきました。でも、それ以外の9言語は本があまり出ていないので、そういう子どもたちのために、その9言語で一生懸命本を出しているのです。これらを出版している方にお話を伺ったことがあるのですが、言語は使わないと発達しないし、語彙も増えないし、表現も豊かにならないのだそうです。だから、公の場では使われていなかった9言語で本を作るのはとても大変で、語彙をどうするのか、文法はこれでいいのかというところを、専門の人に相談しながらやっているのですが、問題が山積していると言っていました。つまり、使用を禁止されていた——ホームランドでは使ってもよかったのですが、ホームランドにはほとんど学校がないわけですから、教育の場では使われていないため、育てていない——言語を、これから育てていくという仕事しなければならぬということなのです。

### (スライド) ザンビアのABCの本

これは、ザンビアの **Bookworld Publishers** という出版社から出ている本です。ザンビアには70以上の民族が暮らしていて、70以上の言語があるのですが、その中でもベンバ、カオンデ、ロジ、ルンダ、ルバレ、ニャンジャ——これはチェワ語でもあります——、トンガの7言語をほとんどの人が使っているということで、ラジオ放送でもこれらの言語が現地語として放送されています。ただし、公用語は英語であるというシチュエーションの中で、このようにいろいろな現地語で、最初はABCから始めようということで子どものための出版を始めています。Bのページを少し紹介したのですが、言語によってBで始まる単語が違うので、挿し絵も違ってきます。

### (スライド) ウガンダの子どもの読書テント

これはウガンダの「子どもの読書テント」というプロジェクトです。**NABOTU (The National Book Trust of Uganda)** が1997年に、ウガンダにおける読書を推進するために創設したNPOです。統一試験の成績が悪い子どもたちが多かった地域で調べてみると、本に接していないということが成績不振の一つの原因だと分かりました。それで **Children's Reading Tent** というプロジェクトを作り、読んで楽しい本をそのような地域に持って行って、学校単位で、皆で読みましょうという活動を行っています。

### (スライド) 南アフリカ : ELRU

これは、先ほどもお話ししましたが、ケープタウンに拠点を置く ELRU という組織の年次報告にある写真を持ってきたものです。”Children need roots and wings”、つまり「子どもは根っこと翼が必要です」ということを言っています。「根っこ」というのはアフリカの文化だと思います。そして、「翼」というのは想像力だと思います。この二つを、子どもたちに提供するための本を作っていきたいと思いますと言っているのです。

### (スライド) ELRU の出版物

ELRU は、教師向けの参考書やコミュニティ作りの資料、ゲームなど、いろいろなものを出しているのですが、その中に子どもの本もあって、いろいろな環境に住む子どもたちを、幾つかの言語で紹介するシリーズというのがあります。これは先ほど紹介した、カエリチャの少年を主人公にした本です。こちらは身体的なハンディを背負っている少女が、学校に行く時にとっても不安に感じるけれど、でも大丈夫、という本です。

それから、この本はどういう話かという、男の子と小人のようなものが出てくるのですが、一般社会で言われているステレオタイプは、本当は間違っているのだよということを、子どもに伝えているのです。例えば、どういうものがステレオタイプという、「ほとんどの歯医者さんは男性だよ」とか、「ヨガをしている人は変人だよ」とか、そういうものには根拠がないということを子どもに理解させようとしています。南アフリカは人種的な偏見だけではなく、いろいろな偏見を子どもから取り除こうとしている。その意味では先進国だと思います。

### (スライド) HIV について伝える本

**Am I a Lion that is people? (ぼくは人食いライオンか?) (Reviva Schermbrucker 文 Enver Essop 写真、ELRU、2004)**

それからこれは、Am I a Lion that Eats People?という本ですが、HIV、エイズに対する偏見をなくそうというもので、中身を紹介します。とてもよくできている絵本です。主人公のこの男の子は HIV ポジティブなのです。この子が行くと、皆が逃げていくので、「じゃあ、僕って人食いライオンと同じなの？」とお母さんにきくのです。すると、お母さんが「そんなことないよ、だってね、一緒に本を読んでもエイズはうつらないよ」、「一緒にご飯を食べてもエイズはうつらないよ」というふうにして、偏見をといていくのです。だから、感染していない子もこの本を読むとエイズのことがよく分かります。

アフリカ大陸の南部は、いろいろな理由で HIV の感染率がとても高い地域です。アフリカの人たちの衛生状態が悪いということだけではありません。内戦で兵士が HIV を撒き散らしたとか、アパルトヘイトが原因になってエイズが増えたという側面もあります。中には、人口の 30%が感染しているという国もあります。エイズというのは、先進国では死ぬ病気ではありません。抗レトロウィルス薬というのを飲めば、感染しても発症を押さえることができます。薬を毎日飲まなければならない煩わしさはあるでしょうけど。でも、アフリカでは、その薬が高くて手に入らないということがありました。薬を製

造る会社が特許を持っていて、値段の中には特許料も含まれていたからです。それはおかしいのではないかとと言われて、今は薬も安くなってきて、現在、無償で配給しているところもあるのですが、だれもがそういう診療所や病院に簡単に行けるわけではありません。エイズは、アフリカが現在抱えている大きな問題の一つだと思います。

60年代に独立をしたアフリカの国は、内戦などがありながら何とか国を作ってきて、ようやく軌道にのせて行こうという時期になって、役人や学校の先生など、国を背負っている働き盛りの人たちがエイズという病気で倒れる。後には子どもたちが残されて、おじいさんやおばあさんたちが経済活動や子育てに復帰しなくてはならなくなっています。昔話の伝え手だった世代が、それどころではなくなっているのです。

というわけで、ルワンダやケニア、南アフリカでも、エイズをテーマにした本が次々に出されるようになってきています。

### **(スライド) HIVについて伝える本**

**Anena's Victory (アネナの勝利) (Lamwaka, Beatrice, Fountain Publishers, 2003)**

**Confessions of an AIDS Victim (エイズ犠牲者の告白) (Adalla, Carlyne, Spear Books, 1993)**

**In My Life: Youth stories and poem about HIV and AIDS (私の人生：エイズについての若者の話と詩) (Center for the Book, 2003)**

**Positively HIV+ (前向きに HIV+) (Vijoen, Dion, Monkey Press, 2003)**

Anena's Victory は、ウガンダの創作物語で、お母さんがエイズになってしまうという話です。それから Confessions of an AIDS Victim は、大学に進学するのだと張り切っていた主人公が、HIVに感染してしまうというものです。In My Life: Youth stories and poem about HIV and AIDS は、南アフリカの若者たちが、エイズに対してどんな考えを持っているかということインタビューし、集めて本にしたものです。それから、これはビーズ細工を登場させた Positively HIV+ という本です。南アフリカだけではなく、アフリカのいろいろなところにビーズ細工はあるのですが、それを使って、先ほどの *Am I a Lion that Eats People* という本と同じように、エイズはこういうことだけ気をつければ移らないよ、ということ子どもたちに伝えています。

### **(スライド) Little hands books・Biblioref**

それからこれは、先ほどお話ししました Little hands books です。安い値段で買うことができ、幼い子どもに絵本に親しむきっかけをあたえています。母語で読めればなおよいということで、いろいろな言語に翻訳されています。南アフリカの言語だけではなくて、エチオピアのアムハラ語、モザンビークのマクワ語、ズールー語やルワンダ語、スワヒリ語、マコンデ語(タンザニア、モザンビークなど)、それからマンディンカ語——マンディンカの人はいくらもいて、マリ、セネガル、ガンビア、ギニア、ギニアビサウなどに分かれて住んでいます——、そして、ポルトガル語——昔、ポルトガルの植民地だったところは、公用語としてポルトガル語が使われていたりするので——、それからトゥイ語(ガーナ)

やヤオ語（マラウイ、モザンビーク、タンザニア）など、いろいろな言語に翻訳されるようになってきています。

また、このシリーズの一部は、自分の好きな言語を入れてダウンロードし手作り絵本が作れるようになっています。簡単なプリンターがあれば、自分で印刷して、子どもたちに読んで聞かせることができるのです。

右は **Biblionef** という団体なのですが、ケープタウンに拠点があり、あちらこちらに、子どもの本を寄贈するという活動を行っています。先ほどの、南アフリカの 9 言語で出している **Kagiso Readers** というのも、ここが中心になってやっています。点字でも本を出しているし、布絵本も出しています。

### **(スライド) Osu Children' s Library**

最後に、2010 年に IBBY 朝日国際児童図書普及賞 (IBBY-Asahi Reading Promotion Award) を受賞した、ガーナで活動している **Osu Children's Library Fund** という団体を御紹介します。<sup>2</sup>

この団体は、子どもの居場所をつくるために図書館をコミュニティセンターにしようということで、子どもたちに給食のようなものを出したり、もちろん読み聞かせもしたりと、いろいろな活動をしています。また、大人のための識字教育もやっています。私がすごいなと思ったのは、この本の印刷・製本はカナダでやっているのですが、ガーナの子どもたちが主人公のこのような写真絵本を、何冊も作っているのです。この団体は、最初カナダの人が中心となって始められたのですが、今はガーナの人たちが次々と入って、ガーナの出版社とも提携して活動を行っています。

私の話はこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

---

<sup>2</sup> <http://www.ibby.org/index.php?id=996> (accessed 2014-6-18)